■　Aotearoa やさしさの循環する国で　第 10 回

今回は OECD 内でもペット保有率、アメリカに次いで第２位、動物愛護の先進国と言われるニュージーランドのペットについて書こうと思う。

ニュージーランドでは全体の 64%の世帯に、少なくとも１匹以上のペットがいると言われており、この数字は過去５年間変わっていない。中でも猫が一番の人気で 41%の飼育率、110 万匹が飼育されている。これはお隣のオーストラリアやアメリカと比べても高い数字で、特にイギリスの２倍の飼育数、という統計がある。近年は犬を飼う世帯も急増していて、34%の世帯で飼われ、約 70 万頭の犬が登録されている。
（CANZ Companion Animals NZ 2020 調べ）

＊動物愛護団体 SPCA の活躍

ニュージーランドには動物愛護団体、里親探しを手がける団体が多い。なかでも SPCA（王立ニュージーランド動物虐待防止協会 Royal New Zealand Society for the Prevention of Cruelty to Animals Inc の略）は一番よく名前の知られている動物福祉推進の慈善団体だ。世界で初めて動物を保護する法律が制定されたのはイギリス。この法律がきっかけになり SPCA が発足。1824 年にイギリスで設立され、ニュージーランドでは 1872 年にスタートした。長い歴史と行政との強いパイプを持っていることが、ほかの保護団体との大きな違いである。

①

②

動物を保護し、獣医師や専門家のケアを経て譲渡先を探すだけでなく、虐待の防止など動物福祉の啓蒙教育も担う。小学校で命の大切さを教えたり、飼い主に適切な飼育法を指導したりの活動にも熱心だ。だからニュージーランドには、動物とどのように接するべきかを幼少期に理解するのは重要なこと、という共通認識がある。

＊ペットを太らせすぎた飼い主に実刑判決

動物虐待は年間 13,000 件を超えるといわれる。筆者には虐待＝故意に身体を傷つけるイメージしかなかった。ところが、だ。ニュージーランドをはじめとする動物愛護の先進国では、餌のやりすぎやネグレクト（飼育放棄）、精神的な苦痛を与えることも重い罪になる。数年前、飼い犬を「歩けないほど肥満させた飼育」が虐待行為に当たるとして、禁固刑２ヶ月、罰金約 10 万円の実刑判決を受けた女性がいた。彼女にはさらに、１年間の犬の飼育資格の剥奪という罰も課された。

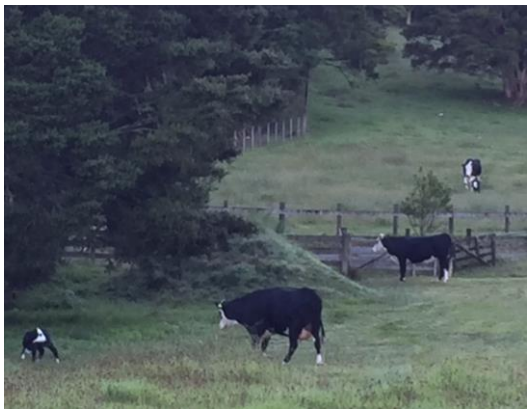
③

訴えたのは SPCA で、捜査令状をもったフィールドオフィサー（動物管理保護官）と警察が飼い主の住まいを家宅捜査し、数匹の犬を同時に保護したという。SPCA は動物福祉法の法律に基づき、動物保護のための権利行使が認められている唯一の団体なのだ。

この犬は１日にフライドチキンや鶏の胸肉 10 枚、さらに犬用のビスケット、という無茶苦茶な量の餌が与えられていた。SPCA で保護観察のもと大幅な減量に取り組んだが、可哀想なことに肝臓の腫瘤の破裂による急性出血で 2 か月後に命を落とした。解剖の結果、肥満が原因と見られる肝臓病やクッシング病などを患っていたことも判明。獣医が心音を聞こうと聴診器を当てても脂肪の層が厚すぎて何も聞こえなかった、と言うほどで死因は肥満と結論づけている。極端な過食状態にあったのに、飼い主は助けを求めたり改善したりする代わりに、歩くのがやっとになるまで過食を続けさせており、SPCA はこの行為は許されるものではないとしている。飼い主の無自覚な飼育によって起きる悲劇を繰り返すまい、と SPCA は今日も動物福祉の啓蒙活動に取り組んでいる。

参考『NZ Herald 「Auckland woman jailed after morbidly obese dog Nuggi dies: SPCA says pooch couldn’t walk 10 metres」』

＊野良ウマで通報される



④

人ごとだと思っていたら、ある日わが家にも突然 SPCA のフィールドオフィサーが訪ねてきた。問題になったのは、どこからかやってきて牧場に棲みついた一頭の馬。飼い主不明の「野良ウマ」だった。

夏季の滞在中だった馬好きの父はご機嫌で、近所のファーマーから干し草を買ってきて与えたり、手懐けようと努力の最中だった。遊びにきた友人が馬をみて「ヒヅメが伸びすぎているから手入れを」と言ったことがあった。山のどこかでご近所の土地と繋がっているようなところに住んでいるので、地続きのどこかの牧場からか迷い込んできたのだろう、と深刻に考えずに数ヶ月が経ったころのことのことだった。

オフィサーは「ネグレクトにより 5000 ドルの罰金を課します」という。うちの馬ではないと言うと、あなたの土地にいる以上、馬の世話はあなた達の責任だという。大急ぎで地元の新聞に有料広告を載せ、飼い主を探すことになった。あっという間に持ち主が現れ、馬は引き取られていったのだった。

声を持たぬ動物に代わって声をあげよう
「動物虐待を見かけたら通報を」

＊ペット虐待の行き着くさき

なぜこんなに動物福祉に手厚いのか、と不思議に思っていたら、こんなデータに出会った。動物に対して適切な飼育ができない、故意に傷つけるなどの行為をする人々の多くが、将来、人間をも傷つける行為に走る可能性が非常に高い、という警鐘をならすレポートだ。

にわかに信じがたいが、OECD の国の中でニュージーランドは家庭内暴力の報告数はトップ。リサーチでは家庭内で女性が暴力の脅威にさらされる時には、飼育動物にも同様のリスクが発生している、とまとめられている。交際相手やパートナーに虐待を受けている女性やペットについての統計（2018 年女性シェルター調べ）がある。22 パーセントの子どもたちが虐待を目にし、23 パーセントはパートナーによってペットが死に至るような虐待を受けた、というものだ。生まれたばかりの子猫を数匹、おもしろ半分に滝壺の中に落として殺害した少年が補導された。命の重みを理解できないこの種の事件に危機感を募らせる大人は多い。

⑤

日本でも動物虐待の事象は減っておらず、2023 年に日本国内で摘発された動物愛護法違反の事件は 181 件と過去最多だったことが警視庁のまとめで分かっている。世界共通の課題だからこそ、ここニュージーランドでもペットと飼い主という範疇を超えた「動物福祉の教育」に力は入る。

＊厳しい引き取りの条件

⑥

全国に約 50 カ所のセンターを構え、精力的に活動する SPCA。フルタイムで働く職員のほか、大勢のボランティアによって成り立っている。運営に必要な資金は、年間 6300 万 NZ ドルにも達する。そのうち 8%は政府からの補助、残りの 92%は付や 70 以上ある直営のリサイクルショップ（opportunity shop=オプショップと呼ばれている）からの売上で賄われている。保護活動の支援は、買い物、募金、ボランティアとしての活動と三段構えになっていて、あらゆる人にとって身近で参加しやすいシステムになっている。

約半数のセンターで動物譲渡のマッチングをしていて、わが家の犬と猫もここからきた。シェルターで保護中の動物はオンラインでいつでも閲覧できる。犬猫はもちろん、豚やニワトリも載っていて、情報は随時アップデートされる。全ての保護動物に獣医師による検査、不妊・去勢手術、予防注射、ノミや寄生虫の駆除が施され、最近では迷子防止のマイクロチップの埋め込みも加わった。

動物の譲渡は有料だ。犬猫には性別、年齢などの条件により対価（75 ドルから 300 ドル）を支払う。これには上記の不妊・去勢手術代金、マイクロチップ費用などがあらかじめ含まれている。新しい家族を迎え入れることは、その一生の責任を負うということ＝大きな責任、という説明があり、新しい家族が死ぬまで世話をする覚悟も聞かれる。希望すればカウンセリングも受けられる。これだけの手間と対価を支払っても動物を迎え入れたい、という人だけが晴れて新しい動物を譲り受けることができるので、引き取った子猫を爬虫類の餌にする、といった類の事件はこれまで聞いたことがない。

一時受け入れの里親になる場合にも、その里親の住居環境の調査を行い、里親として妥当と判断された場合のみ動物が手渡される。わが家の場合、犬の走り回れる広い敷地はあったが「出口のない柵があること」という条件が満たせず、犬の里親にはなれなかったことがあった。

＊ペットショップ大繁盛？

ペットブームと言われ続けている日本でも、その保有率は３割程度。日本ではペットショップなどの専門業者をはじめ、ショッピングモール、最近はホームセンターでの生体販売はお馴染みの光景で、子猫、子犬の時は数十万円の値段がつき、動物の年齢が上がるにつれて、その販売価格は反比例するのがふつうだ。

ではペット保有率が６割超のニュージーランドではどうか。ペットショップ大繁盛？というとそうではない。ペットフードやペット関連用品を販売するお店は多くあっても、子猫や子犬のみを販売している生体販売の専門店は見かけない。ペットの入手先は主に SPCA。あるいはブリーダー（繁殖専門業者）や知り合いから有償で譲り受ける、という。

見栄えのする血統書付きのペットを求めるのでなく、行き場を失った動物たちを譲り受けたい、という人が圧倒的に多いのもキーウィらしい。年間約３万匹の保護動物の引き取り手が決まるという。子猫や子犬は引き取りの希望者が多いので値段は高め。高め、といっても最高額は 300 ドル（2 万 7000 円ほど）だ。日本で子犬、子猫の生体販売の値段は 20―30 万円がふつうだと説明すると、キーウィは「桁が一つ多い！！」とびっくりする。

＊ペットフードも医食同源

今年も真冬にオークランド、ウエリントン、クライストチャーチの３箇所の会場で大きな展示場を数日間借り切って開催される FOOD SHOW に出かけた。グルメな食材に混じって、ペットフードのプロモーションをやっているブースがあった。わが家にも猫が 2 匹いるので立ち寄った。餌代をケチると獣医代が高くつくとの経験則から、ペットフードは少々値段がはっても、生産国が明らかで原材料のはっきりしたものを選ぶことにしているのだ。

近ごろの輸入ペットフードには、レンダングと言われる人間の食用に適さない肉を加熱処理をして、油脂とたんぱく質を分離した後の副産物が原料になっているものも多い。これらは肉骨粉と呼ばれ、クズ肉、ヒヅメやツノ、内臓、血液、施設で安楽死や病死した動物の肉、レストランの廃棄食材まで混入している可能性が高いのに、その実態はあまり知られてない。実際のペットフードのパッケージには◯◯ミールとか◯◯ボーンミールという原材料名で表示されている。

対極にあるのがオーガニックのペットフードだ。オランダ発の Y 社の製品が有名だが、オセアニアにもいくつか誕生した。食材や作り方、味にこだわった高価格帯のプレミアムペットフードとはさらに一線を画す。オーストラリアからの輸入ペットフードが会場に並べられていた。お国を反映してカンガルーの肉が原材料に使われている。増量のために穀物を混ぜてカサ上げしていないのはもちろんのこと、オーガニックで無添加、トレーサブル（原料の出所の追跡が可能）な厳選された原材料が使われている。ニュージーランド産だと、グラスフェッドビーフやラムはもちろん、ベニソン（鹿肉）などもあり１キロ 11,000 円と結構な値段がついている。高価な商品にもかかわらずよく売れていた。質問をする人も多く、試供品も大人気。飼い主の食の安全への意識の高さが伺えた。

⑦

「国産」と表記されていても原材料が国産と限らないし、栄養基準も分析値だけにとらわれずに、原材料の質を見るべき、と言われるほどペットフードが危ない食べ物になっている気がする。わが家の猫たちは、庭で小鳥を捕まえたり、ウサギやネズミやイタチを捕食したりと忙しい。キャットドアから出入りが自由なので、本能の赴くまま夜間に狩りをし、ついでに必要な栄養も補っているのかもしれない。朝、ドアの前に置かれたボディが上か下半分になったウサギやネズミを踏みそうになって、悲鳴をあげることも珍しくない。うさぎは長い耳の部分と後ろ脚は食べずに残していることが多いが、ビジュアル的にそんなにおどろおどろしくないから許容範囲だが、頭部のないネズミだけはごめん被りたい。二匹のうち一匹は生肉が好物なので、料理中にもおねだりにやってくる。新鮮なものなら鶏、牛、鹿、伊勢海老の残り、鯛のアラ、と欲しがるままなんでも与えている。猫達たちは木によじ登ったり丘の上まで往復したりと、とにかくよく動き、昼間はひたすら日向ぼっこして眠りこけている。

⑧

ペットが病気がちなら、飼い主としてすぐに実行に移せるのは毎日のエサを変更することだ。新鮮な肉が入手できれば、エサ作りはそう難しくない。筆者も一時、副腎皮質を患った飼い猫のため、ミンサーを購入して生肉を挽いて手作りした時期がある。エサをすべて自然でシンプルなものに変えて以来、全く獣医に行く必要がなくなった。二匹とも健康そのものだ。現在、日本で販売されているペットフードの大半はアメリカ製。FDA(アメリカ食品医薬局)は肉骨粉をペットフードにリサイクルすることを禁じていないので、一度お手元のペットフードのパッケージを確認してみては？

＊家族の一員として

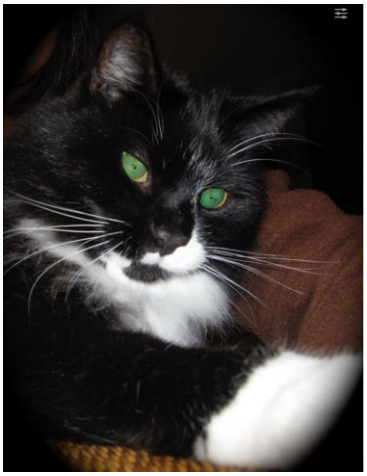
コンパニオンアニマルは直訳すれば、伴侶動物。愛玩動物を意味するペットとは意味が違う。家族同様の存在の動物はペットでなくコンパニオンアニマルと呼ばれ、一方的に愛情を注ぐのではなく、心が通じ合う対象として捉えられている。

筆者も身一つでニュージーランドに移住した直後、コンパニオンアニマルとして猫を飼った。学校の行き帰りによく覗いていたペットショップに、ある日雑種の子猫が１匹いたのだ。子猫がいるなんて珍しい！とケージから出してもらって一目惚れ。そのままコートの中で温めながら連れ帰ったのが、Moochi との出会いだった。ペットショップの猫は避妊手術を受けていないとは知らなかった。生後１年ほどで子どもを産んで、眼の開いたばかりの４匹を残して Moochi は亡くなった。

教育大に通う毎日だったが、悲しんでばかりいられない状況が待っていた。車がないのに家と大学を往復してミルクやりをしなければならなくなったのだ。学食でお茶しない？と誘われて「子猫４匹にミルクやらなきゃいけないの。ごめんね」というと、クラスメートが目を剥いている。あとで分かったのだが、I have 4 kittens to give milk と言ったつもりが I have 4 kids to give milk（４人の子持ちなのでミルクやらなきゃならないの）と聞こえたらしかった。

＊ペットロスと忌引き

Moochi の残した子猫は２匹を友人に引き取ってもらい、パンダのような黒白の猫と体の弱いキジ猫の２匹を手元に残した。10 週間の教育実習中に誰もいない家においてもいけず、学校に相談するとあっさりと OK が

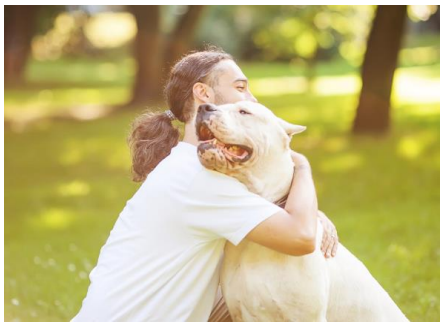


⑨

出て、実習教育のため宿泊していた寮に連れて行くことが決まった。２匹は車で学校に出かける私を、毎朝寮の窓から見送ってくれた。教師の仕事が見つかり、クライストチャーチから北島に引っ越した時も、荷物といっしょに車に乗せてモーテルに泊まりながら１泊２日の車の旅を経験した。

コンパニオンである彼らとの穏やかな暮らしが続いていたある時、キジ猫が体調を崩しているのに気づいた。仕事に出かける前に獣医へ駆け込み、様子を観察してほしいと伝えて出勤したが、昼前に体調が急変という知らせが学校に入った。昼休みまで待ってクリニックに駆けつけると、衰弱しているのに私に気づき立ちあがろうとしているキジ猫がいた。助かる見込みがないこと、生きている１秒１秒が痛みを伴うこと、などの説明を聞いて心が揺れた。ニュージーランド人はこういう時、安楽死を選ぶ。昼休みなので、時間があまりない。ゆっくり考えてから今後のことを決めたかったが、一刻一刻が痛みを伴うと聞いて決断した。苦しませてはならない、と。

初めての土地で一緒に暮らしたコンパニオンアニマルとその死。仕事に戻った私の目は赤く泣き腫らしていたと思う。同僚に「どうしたの？」と聞かれた。説明すると、彼女は教頭先生のところへ飛んで行き、私の元へやってた教頭先生は開口一番「今日は帰っていいよ」と言った。「ペットの死」で学校を休む？逡巡する私にかけられた言葉は「何が死んだか、でなく、あなたは苦しんでいて、喪に服す必要があるということだ」と言われた。



⑩

その時の気持ちは簡単には言い表せない。この経験は、やさしさの循環するこの国に長く住みたいと思うきっかけになった。あちこちの国に住みながら移動する暮らしに終止符を打ち、気がついたらニュージーランドの永住権を獲得し、将来のキーウィハズバンドにも出会っていた。

＜写真キャプション＞

①SPCA のシンボルカラーはよく目立つブルーだ。
②こどもを対象にした命の大切さを教えるプログラムが盛んだ。中学や高校でも定期的に SPCA にものやお金を寄付するためのイベントが開かれている。
③太り過ぎて 10 メートル歩くのに３回休まなければならないほど太っていた NUGGI（ナギ）。保護された時の体重は 53.7 キロ。
④わが家の牧場の一部。ここに突然、持ち主のわからない馬が現れて住み着いた。放牧していたマオリ豚と仲がよく、いつも一緒だった。
⑤筆者の現在のコンパニオンアニマル の２匹。茶色（大きい猫）は SPCA ではカポーネ（アルカポネ）という愛称で呼ばれていた。抜群に気立てが良いのに、よりによってイタリアマフィアの名前？なんと、ナイフで鼻あたりを X に切り裂かれた（虐待の）形跡が鼻にあるからだという。心の傷も鼻の傷も完全に癒え、先住猫としての貫禄も出てきた。
⑥SPCA 直営のリサイクルショップで。犬のスカーフはシンボルカラーの青。古着はもちろん、食器やリネンなど日常生活に必要なものが安く手に入る。掘り出し物が見つかることも多いので、老若男女に人気がある。
⑦市販のペットフード。質はピンからキリまで。医食同源はペットにも当てはまる。
⑧新入りのグレーの猫も狩りが上手い。獲ってくると、必ず室内に持ち込んで私たちに見せに来る。これは食べる前のウサギ。
⑨筆者はパンダのような白黒の動物が好きだ。この猫は MOOCHI の産んだ４匹のうちの１匹。最期の瞬間まで腕のなかで看取った。
⑩心を通い合わせ、伴侶として、その一生を請け負う。一生を終えた伴侶動物を見送った後の「ペットロス」は経験しないとわからないとても辛い体験だ。

（さかいケイツみか whangarei 在住）